

現代能歌劇「井筒」台本

原作：能「井筒」 伊勢物語題材による 世阿弥作
作曲：小菅泰雄

舞台 = 舞台背面は「鏡板」に替わる垂れ幕がある。垂れ幕の前に「後座」になって、舞壇に10名の演奏者が椅子にかけて列ぶ。舞台正面には、すすきを植えた井筒の作り物が置かれる。

室内管弦楽 = 木管四重奏(Fl. Ob. Cl. Fg.)。弦楽四重奏(Vn.1 Vn.2 Vla. Vc.)
ハープ、ピアノ各1

第一場「在原寺」

時 = 室町時代の足利義満將軍の頃。秋月の美しい夜。 所 = 大和国石上^{いそのかみ}の在原寺。

登場人物

清子(メゾ・ソプラノ) = 紀有常^{きのありつね}の娘

諸国一見の旅の僧(バリトン)

舞台 = すすきを植えた井筒の作り物がおかれている。

名乗り笛 = ピッコロの旋律が静かに流れる中、下手から旅の僧が登場。

名乗り

僧 諸国一見の旅で在原寺に着きました。

指し(サシ)

ここは紀有常の息女・清子様と在原業平^{いそのかみ}夫妻が住んでいた、大和の国石上。

謡い

有常^{ありつね}という名前^{なまえ}とはうらはらに、この世は無常^{むじょう}。
無常な世で夫婦を誓い合った、息女と業平の冥福を祈りましょう。
松風吹く秋の淋しい寺の庭
西^{にし}に傾き軒を照らす月の光
軒端の草も昔を忍ぶ風情
さて、ひと休みしよう。(腰をおろす)

A 次第

清子 (手桶とひしゃくを持って登場)

和歌「風吹けば沖つ白波龍田山 夜半にや 君がひとり行くらん」(伊勢物語第23段)

指し(サシ)

甲斐のない人を待ちわびながら時が過ぎました。

人目を忍んで、こうして生きています。

下げ歌

毎朝仏様に手向ける功德の水は、桶に映る月さえ心が澄みます。
いつの頃からか 一心に 仏の糸に縋るようになりました。お導きください法の声。

上げ歌

今は、阿弥陀如来の御誓願^{ごせいがん}で成就した衆生救済極楽浄土は本当と思えます。
有明の月が向かう山は西方の極楽
四方の眺めは一面秋の空
今は松風の音が静かに聞こえる
いつ嵐になるかわからない
無常なこの世の夢は
何の音で目覚めるのか
(ひしゃくで塚に水をかけ回向する)

B 問答

僧 この塚はどなたのですか?

清子 在原業平様の墓だと、功德の水を手向けています。

僧 そうですか。縁者のお方ですか?

清子 業平はその名を残しましたが、はるか昔の人。縁のあろうはずもございません。

僧 そう仰せになります、業平は伊勢物語に「昔男ありき」と語られたお方。

清子 ここは在原寺で、主は名高い業平。

僧 偉業は絶えずに語られて、

清子 聞こえは消えず 世の語り、

二重唱

僧 (昔男ありきと

清子 (昔男ありきと

清子 在原寺は古寺にて 松は老木一群のすすき
塚には露が深々と なつかしき風情

C 誘い台詞

僧 もっと業平のことを、くわしく聞かせてください。

清子 和歌「風吹けば沖つ白波龍田山 夜半にや 君がひとり越ゆらん」(伊勢物語第23段)
繰り(クリ)

清子 業平は有常のご息女清子様と、優雅で睦まじく暮らしておりました。
が、河内の国高安にも恋人がいて、忍んでお通いでした。
この和歌は夜の道に行く夫を案じて謡った和歌で、これで二人の心が通じ合い、
恋人と縁が切れたのでした。

僧 誠に情けを知る人の歌は心に響きます。歌で心を伝えたのも道理です。

D 曲(クセ)

清子 昔、大和国石の上に、隣同士で使う井戸の囲いに寄り添って、二人仲良く遊ぶ幼子があり、
袖を井戸囲いに掛け、姿二つを水に映し、語らい遊んでおりました。
心の水も清らかに、うつる月日に大人びて、互いに恥ずかしい今となりました。
その後、かのまじめ男は、言葉使いも美しく、心の花に色添えて、「筒井つの...」

僧 和歌「筒井つの井筒にかけしまるがたけ 過ぎにけらしな妹見ざる間に」(伊勢物語第23段)

清子 その時、女も

和歌「比べ来し、振り分け髪も肩過ぎぬ、君ならずして誰かあぐべき」(伊勢物語第23段)

E 論議

僧 あなたは何とゆかしいお方でしょう。お名前をお聞かせ下さい。

清子 私は「筒井つの女」有常の娘。夫婦の契りを交わした年は 筒井つつ、筒井つつ。
いつつ、いつつ(謡いながら下手に退場)

僧 夫婦の契り交わした年は...筒いつつ...、5歳の時か?

中入り

第二場「僧の夢」

時 = 前場に続く秋月の美しい夜更けから明け方。

所 = 大和国石上の在原寺

上げ歌

僧 (ステージ中央にて)
更けゆくや 在原寺の夜の月
仮枕^{むしろ}衣を裏がえし 夢さそい
苔の筵^{むしろ}に横たわる

一声(イッセイ)

清子 (業平の形見の衣をまとして登場)
和歌「あだなりと名にこそたてれ桜花^{とし} 年に稀^{まれ}なる人も待ちけり」(伊勢物語17段)

これで私は、人待つ女とも言われました。

井筒で遊んだ幼子の頃から、真弓櫓弓の月日を業平と暮らしました。

今宵は業平の形見の衣をまとい、久しぶりに井戸を覗てみましょう。

月がさやかに澄みわたり、井戸の水に映って美しい。

和歌「月でなく 春は昔の春でなく 我が身一つはもとの身にして」(伊勢物語第4段)

乗り地(ノリジ)

清子 和歌「筒井つの 井筒にかけし麻呂が丈、(伊勢物語第23段)

僧 井筒にかけし麻呂が丈、生いにけらしな...

清子 老いにけるぞや 老いにけるぞや...」。

僧 在原業平の形見の衣をまとった婦人は女ではなく...何と、男に見えるではないか...業平の面影。

清子 (井筒の中をのぞく) ああ、業平さま!... お懐かしいそのお姿...

僧 地上をさまよう婦人の魄(たましい)は
萎えてゆく花の色があせても なお匂うが如く残りて

鐘の音も ほのぼのと

松風がゆらす芭蕉の葉に

夢は破れて覚めにけり(清子:僧の謡いの中を静かに退場しはじめる)

夢は目覚めて明けにけり

後奏 奏楽による和歌の旋律

「風吹けば沖つ白波龍田山夜半にや 君がひとり行くらん」(伊勢物語第23段)

清子 後奏の中、静かに退場する。

幕

